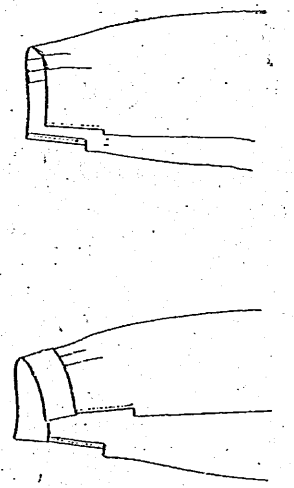
◇　斜め布のつぎ方はどうしますか。

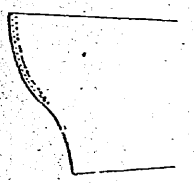
◇　斜め布の釣合はどうすればよいでせうか。

（チ）袖及び袖附け　圖のやうに袖口あき止まりより少し奥に切り込みを入れ、細い三つ折り縫ひにします。袖先に五つほどの襞を取り、袖口布を附けます。縫ひ縮めにしてもさしつかへありません。（假縫ひ）。次に袖下を縫ひます。



袖をゆるませるため、圖のやうに細かく縫つておきます。

袖山を肩の一番高い所に定め、次に袖下を合はせ、こゝを中心に、縫ひ縮めのない間を平な釣合とじて、身ごろから待針を打ち、次に、縫ひ縮めのある間は、袖が平にゆるむやうに袖の方から待針を打ち、假縫ひをします。



中等被服一

文部省

（後）￥1.20

昭和二十一年四月一日 印刷　同日翻刻印刷
昭和二十一年四月五日 發行　同日翻刻發行

〔昭和二十一年四月五日　文部省檢査濟〕

中等被服 一　〔後〕 定價壹圓貳拾錢

著作權所有　著作兼發行者　文部省

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION (DATE APR. 1, 1946)

翻刻發行者　東京都神田區岩本町三番地　中等學校教科書株式會社　代表者　穐井寅雄

印刷者　東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　大日本印刷株式會社　代表者　佐久間長吉郎

發行所　中等學校教科書株式會社

教科書番號 112ノ一

着てみて、その位置、ゆるみの入れ方及び袖丈などを調べ、具合がよかつたら本縫ひをします。

縫ひ代を〇・八センチ（二分）ぐらゐに切つて、裁ち目はかゞつておきます。ほつれやすいものは、斜め布でくるみます。

（リ）帶及び帶通し附け　薄地の時は芯布を入れます。

（ヌ）穴かゞり　前中央に三箇、袖口に二箇づつ。

（ル）名札附け　上前の見返しに附けます。

（ヲ）仕上げ

（ワ）ボタン附け

仕上げたら、先づ、着てみての具合を全體的に調べ、後、箇々の製作過程を調べます。そればかりでなく、製作に就いてのいろ〳〵な氣づきや研究などを整理しておくと、後のためによい資料となるものです。

着用・手入れ

五　運動服

被服の形式を、動作に適應させることだけから考へると、先づ、できるだけ覆ふ部分を少くし、その上、できるだけ體型に合はせ、被服が動作をさまたげないやうにすることが第一です。しかし私どもの場合は、どこまでも女子としてのたしなみを忘れてはなりません。

運動服としては、なほこれに加へて、帶・紐の部分はしまい、その他はゆるやかにするとか、開口を多くするとか、脱ぎ着を容易にするとか、いろ〳〵な點が考へられなければなりません。これらは動作を輕快にするばかりでなく、衛生上からも大切なことです。

材料は、特に洗濯のきく堅牢な地質がよいことは、いふまでもありません。

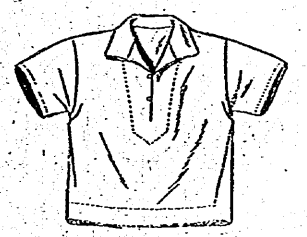
上衣は白色が最もよく、下衣は紺系統、又は黑が普通です。

◇　運動服に二部式構成のよい點を考へなさい。

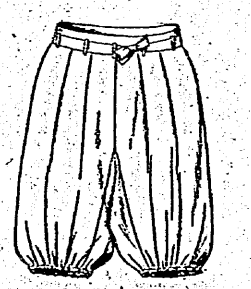
◇　運動服の構成を考へる時、姿勢のどんな變化を考慮しなければなりませんか。

形

上衣



中ばき



材料

仕立て方

上衣

一　型紙の取り方

（一）身ごろ

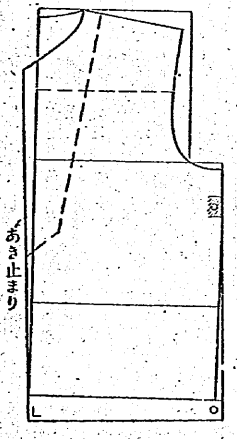
國民學校でのシャツの基礎線を基として、圖のやうにお直しなさい。

肩下り　二・五センチ（七分）。

肩先　一センチ（四分）ぐらゐ入れる。

袖ぐり　一センチ（三分）ぐらゐ下げる。

衿ぐり　頸廻りの六分の一。



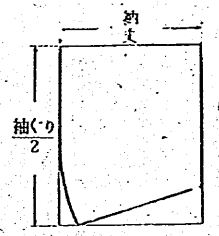
前は衿の形を整へるために、圖のやうに前中心で一・五センチ（四分）ぐらゐ出します。

前衿ぐり線を圖のやうに殆ど直線にくります。線の高さは隨意です。

◇　あき止まりは、どうしてきめますか。

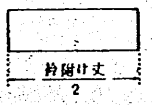
（二）袖

袖丈は實測の長さを用ひます。



◇　身ごろと袖を、制服のと比較しなさい。

（三）衿



衿附け丈は前あきの縫ひ代を引いてきめます。

衿附け線は約二センチ（五分）までくり上げてもよいのです。

衿幅は五センチ（一寸三分）ぐらゐとします。

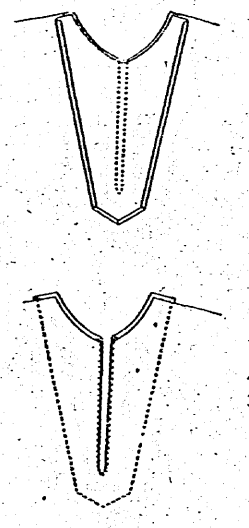
二　裁ち方

地直し、縫ひ代の附け方、布の裁ち方は、いづれも制服にならつてします。

三　縫ひ方

（イ）前あきの始末（い）圖のやうに身ごろと見返し布を中表に合はせて、一センチ（三分）の縫ひ代で縫ひ、後、中央にあき止まりのきはまで切り込みを入れます。

（ろ）圖のやうに、表へ返して見返し布の周圍におさへミシンをかけます。



（ロ）肩合はせ・肩當て附け　後身ごろと肩當て布とで前身ごろを挾んで縫ひます。

（ハ）衿附け　衿を身ごろの裏側に合はせて附け、（い）圖のやうに衿の兩端を縫ひ、表へ返して、（ろ）圖のやうに衿裏をまつります。

（二）袖口の始末　用布の都合によつて工夫します。

◇（は）図のやうに袖口布を附ける場合は、いつ附けたら都合がよいでせうか。

（ホ）袖附け　縫ひ代は身ごろへ返し、おさへ縫ひをします。

（へ）袖下及び脇縫ひ　袋縫ひ又は折り伏せ縫ひにします。

（ト）裾の始末

（チ）當て布・ボタン掛け・ボタン附け　前衿ぐりから八センチ（二寸）ぐらゐさがつた所を折りの止まりとして、當て布を附けます。あき止まりは図のやうに縫つておきます。

中ばき

一　型紙の取り方

脇丈　胴廻りの所から膝下まで測ります。

脇線　下ばきより五センチ（一寸三分）ぐらゐ廣くします。

まちの上部のくり方　下ばきの股のくりより二センチ（五分）ほど下げてくります。

胴廻り線　図のやうにします。

紐　丈は胴廻りに結び代を加へます。

幅は三センチ（八分）ぐらゐとします。

（い）の間は一センチ（三分）以上。

二　裁ち方

型紙を身ごろとまちとに分けて裁ちます。

◇　各部の縫ひ代を考へなさい。

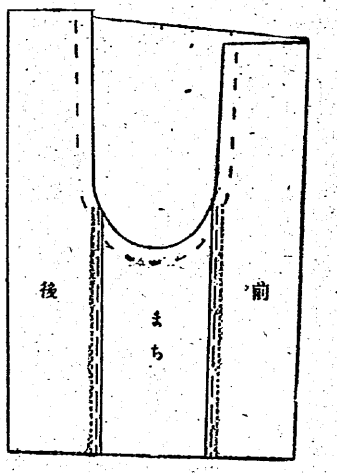
◇　廣幅物での裁ち方、並幅物での裁ち方を工夫してごらんなさい。

三　縫ひ方

（イ）まち附け　縫ひ代は図のやうに始末します。

（ロ）股上縫ひ

（ハ）裾の始末



（ニ）上部のまとめ

襞の取り方　胴廻りの寸法を少しゆるめに取り、幅の餘分を襞にします。

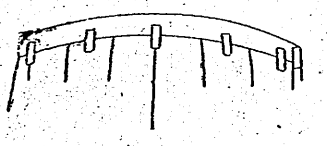
襞は前後とも左右二つづつ、兩脇に一つづつ取ります。なほ、はいて運動してみて、襞の位置や分量などを整へます。

脇あけ　右脇の襞のかげになる所に一五センチ（四寸）ほどの脇あけを作ります。

◇　あきの始末を考へなさい。

腰布　出來上り幅三センチ（八分）ぐらゐにします。

穴かゞり　脇あけの上、腰布端の襞の上側に穴かゞりをします。



（ホ）帶

（一）帶通し附け　幅一・五センチ（四分）ぐらゐ、長さ六センチ（一寸六分）ぐらゐの紐を、七箇か八箇作り、腰布の縫ひ目を中央にして附けます。

（ト）仕上げ

（チ）裾口の紐通し

着用・手入れ

運動服は、その性質上よごれやすく、又いたみやすいものですから、早いうちに手入れをすることが肝要です。

◇　運動してみて具合のわるい部分に氣づいたら、その原因を調べなさい。

◇　汗の附いたまゝにしておくと、どうなりますか。

◇　運動服のいたみやすい所はどこですか。

六　下着類

下着には肌着・下ばき・中ばき・中着などがあります。總べて、うは着のよごれを防ぎ、正しい容儀を保つために、うは着の形に應じて作ることが大切です。

又これらは保健・衛生にも直接の關係をもつものでありますから、これに適する形を選び、運動や脱ぎ着にも便利なやうに工夫しなければなりません。

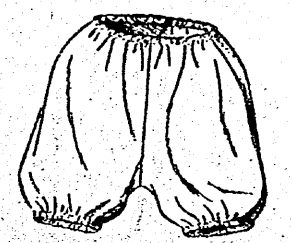
◇　自分の着てゐる下着の種類と數及びその材料を調べてごらんなさい。

冬季用下ばき

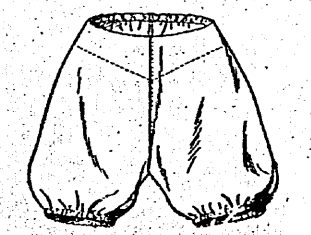
形

冬季用は殊に、外觀などよりも、保温を重視すべきです。

その一



その二



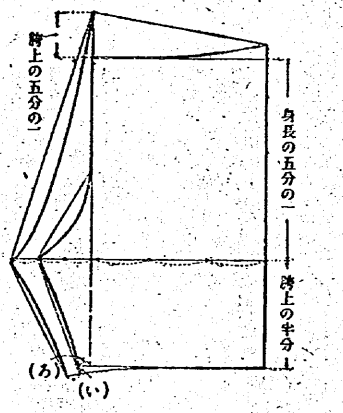
材料

衛生に適し、なるべく肌ざはりがよくて、たび〳〵の洗濯にも耐へる材料を用ひなければなりません。

仕立て方

その一

一　型紙の取り方



(い)の間は一センチ(三分)、(ろ)は二センチ(五分)。

二　裁ち方

◇　各部の縫ひ代はどれくらゐいりますか。

三　縫ひ方

跨上・跨下は縫ひ代を片返しにするか、又は割つて、縫込みをおさへます。胴廻り・裾口が厚くならないやうに始末します。

◇　跨上を縫ふ時、特に注意することは何ですか。

その二

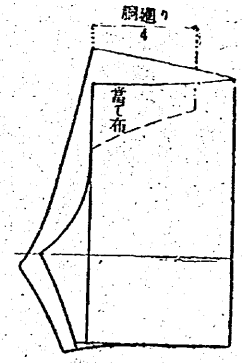
一　型紙の取り方

二 裁ち方

三 縫ひ方

當て布はどのやうに附けたらよいか、考へてしなければなりません。

◇ 後だけにゴム紐を用ひたのはなぜか、考へてごらんなさい。

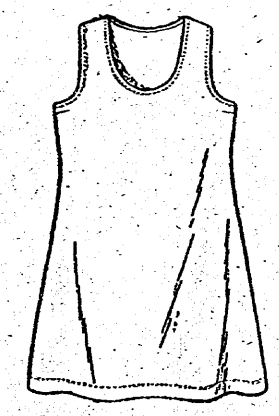


着用・手入れ

◇ 下着類の手入れは、ふだん、どんなにしてゐますか。

中着

形



材料

◇ どんな材料が適當ですか。

仕立て方

一 型紙の取り方

二 裁ち方

次の部分の縫ひ代を考へて裁ちます。

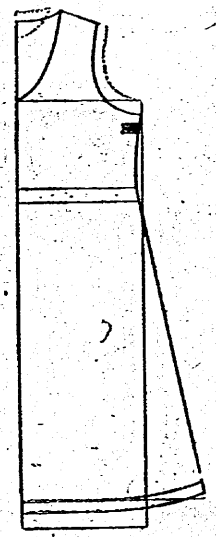
肩

衿ぐり

脇縫ひ

袖ぐり

裾の始末



三 縫ひ方

どのやうな順序で縫ふのがよいか、又、縫ひ方でどんなことに注意するかを、考へてなさい。

着用・手入れ

既製品の研究

自家で作つたのと、既製品とを比べ、

(イ) 既製品の下着にどんな種類があるか、

(ロ) どんな材料で作つてあるか、

(ハ) どんな作り方がしてあるか、

(ニ) 既製品を使ふには、どんな注意がいるか、

などを研究すれば、得るところが少くないでせう。

〔増〕下ばき・中ばき・中着

形

（い）脱ぎ着に便利なやうに脇あきにした下ばき。

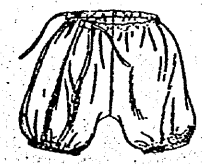
（ろ）用布の都合で、胯の部分にまちを入れた下ばき。

（い）（ろ）のほか防寒のためには、膝を覆ふ程度に膝下を長くし、又、裏綿を入れてもよいのです。

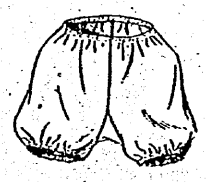
（は）脱ぎ着に便利なやうに、前を打合はせにした中着。

（に）（ほ）標準服の中ばき。

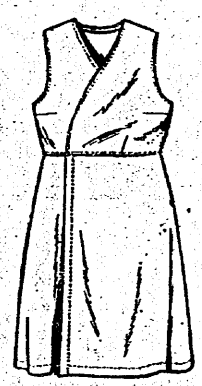
（い）



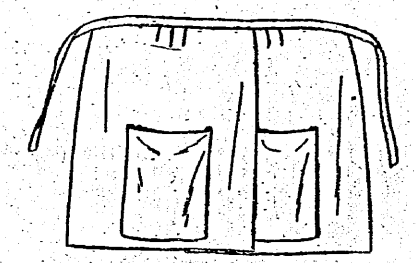
（ろ）



（は）



（に）



（ほ）

中ばき（に）

標準服乙型の下着のうち、特に考案されたもので、容儀・活動及び保温に就いて考慮してあります。

◇　あし布を附けるわけを考へてごらんなさい。

仕立て方

一　寸法

（一）裾布

丈は、うは着の下衣の丈より一〇センチ（二寸六分）内外短くします。

幅は、腰廻りに後重なりと前重なりとを加へたものです。

大幅七三センチ（一尺九寸）二布か、並幅四布でよく、後重なりは腰廻りの四分の一ぐらゐが適當です。前重なりは後重なりより少くてよいのです。

（二）あし布

丈は膝上一二センチ（三寸二分）ぐらゐの所から、裾布の裾口から四センチ（一寸）ほど上までとします。幅は並幅ぐらゐとします。

（三）紐

丈は凡そ胴廻りの二倍に結び代を加へたものとします。

二　裁ち方

三　縫ひ方

（イ）あし布の上下と裾とを三つ折りにして縫ふか、くけるかします。

（ロ）あし布を裾布の幅の中央に裾から四センチ（一寸）ほど上げて當て、縦の兩横を縫ひ附けます。幅は三センチ（八分）ぐらゐゆるめる。上下共に丈夫に絲留めをします。

（ハ）二枚の裾布の端を出來上り圖のやうに、前後いづれかを重なり分だけ重ね合はせ、次に腰廻りと胴廻りとの差を襞にします。襞は重ね合はせのさかひに一つづつ、兩脇に三つづつぐらゐ取ります。

（ニ）紐附け　後丈の端を四センチ（一寸）ぐらゐつめて、裾で開かないやうにします。

七　作業服

心構へが身構へに現れ、身構へがまたよく心構へを作ることは、私どもの常に經驗することであります。輕い作業には、平常着の上にちよつと何かをまとへば足りますが、非常の時の活動や、農耕作業など力一ぱい働く時は、特にそれに應じた作業服に着かへるやうにします。

作業服は活動の能率と保健・衛生の點からは、運動服と全く同樣に考へてよいのです。唯、季節によつて保溫に注意し、作業によつては、外傷に對する用心もしておかなければなりません。

材料は地質・染色共に堅牢なものがよいのはいふまでもありません。

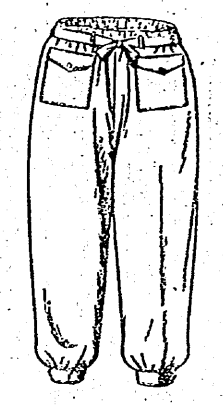
◇　作業服の形式は一部式と二部式と、どちらがよいでせうか。

◇　作業の狀態、下に着る物との關係などによつて、上衣・下衣それぞれにどんな特徴のある形式が見られますか。

◇　作業の狀態によつてどんな附屬品が必要ですか。

作業服下衣

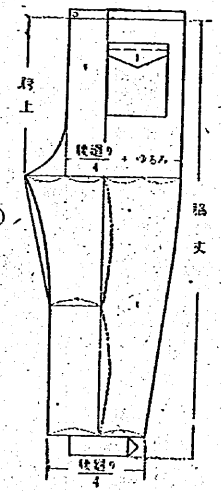
形

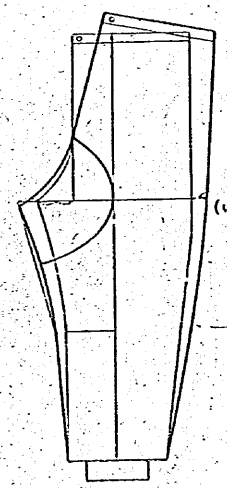


仕立て方

一　型紙の取り方

からだにあまり密着したものは、體型をあらはにすると共に、動作を不自由にする傾きがありますから、下に着るものとの關係をも考へて、適當なゆるみをもたせるやうにします。





(い)の間は三センチ（八分）ぐらゐ。

脇丈は、靴なしで胴廻り線から床までを測ります。足くびから床までの寸法がゆるみとなるわけです。股上は身長の五分の一に二センチ（五分）ぐらゐ加へます。後股上は胴廻り線で五センチ（一寸三分）倒し、同じだけ上げます。上部は、紐をしめるために、前後とも二センチ（五分）ぐらゐ長く出します。

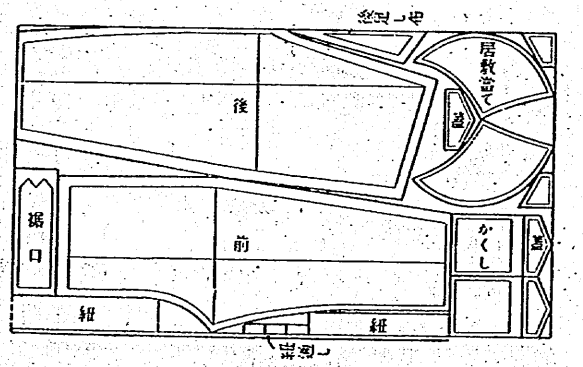
脇丈のうちに、圖のやうに、幅四センチ（一寸）の裾口布を附けます。裾口布を附けず、足くびでしぼることもできます。

◇　後股上線を倒すとよい理由を考へなさい。

二　裁ち方

布幅　七三センチ（一尺九寸）

總用布　二二八センチ（六尺二分）



型紙の基礎線を布目に合はせて取ります。

型紙のほかに帶・帶通し・膝當てを取ります。

◇　下ばき・中ばきにならつて、各部の縫ひ代を考へなさい。

◇　からだの發育に應ずるための餘分の縫ひ代を、どこに入れますか。

◇　膝當ての位置と大きさを考へなさい。

三　縫ひ方

丈夫にしつかりと縫ひます。いたみやすい所は初めから補强しておきます。

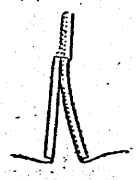
作業服はどこでも動的體勢に合はなければなりませんから、假縫ひをして、種々の動作をしてみて、適否を調べる必要があります。

（イ）かくし附け

（ロ）膝當て附け

（ハ）跨上縫ひ　後には居敷當てを附けます。

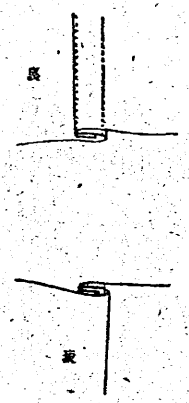
（ニ）脇縫ひ及び裾口あきの始末　裾口あきは六センチ（一寸六分）ぐらゐとして、脇縫ひをします。縫ひ代は前へ返し、あきは圖のやうに始末します。



脇縫ひにはおさへミシンをかけます。

（ホ）跨下縫ひ　腰のふくらみに合はせるために、後跨上・跨下ともそれ〳〵二分の一ぐらゐを、よく伸して縫ひます。

跨上・跨下縫ひ共に、圖のやうに始末しても、さしつかへありません。



（ヘ）裾口布附け

（ト）上部の始末

（チ）紐作り・紐通し附け

（リ）穴かがり

（ヌ）仕上げ

（ル）ボタン附け、上部細紐又はゴム通し

◇　細紐を用ひる場合はどう工夫しますか。

着用・手入れ

着方に就いて、上衣・下衣どちらを上にするかは、作業の狀態によつてきめます。

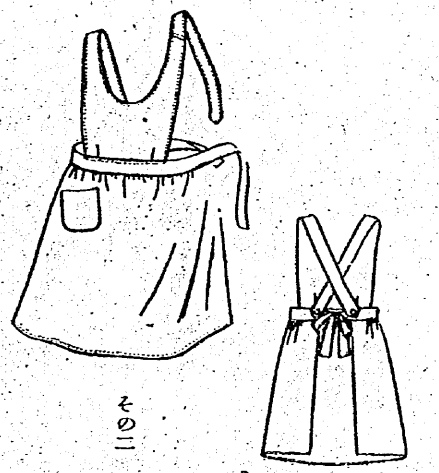
下肢の分れてゐるこの種のものを着た時でも、女子のたしなみを忘れてはなりません。

使用後は直ちに次の作業のために、整備しておく習慣をつけることが大切です。

〔増〕作業前掛

形。

その一



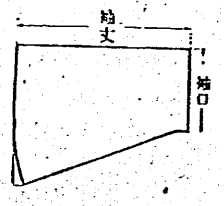
その二

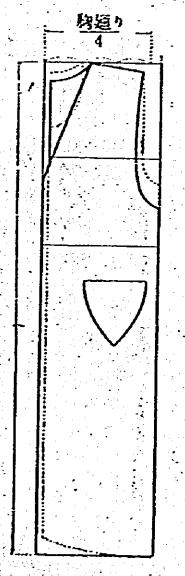
その一

・仕立て方

一　型紙の取り方

和服用としては、圖のやうに、衿肩あき・前あきの大きさを直します。なほ、前あきは望みの形にきめ、肩の厚みなどによつて加減します。





二　裁ち方

◇　布幅が身ごろの幅より不足する時は、どう工夫しますか。

三　縫ひ方

その二

一、型紙の取り方

二　裁ち方

布幅　七三センチ、
（一尺九寸）

總用布　一二〇センチ
（三尺一寸七分）

八　標準服乙型

昔からの着物が、どんなにわが氣候・風土にぴつたりしたものであるかといふことは、新緑の候、衣更への爽かさに、殊にしみ〴〵と感ぜられます。軽快で風通しがよく、脱ぎ着も便利です。

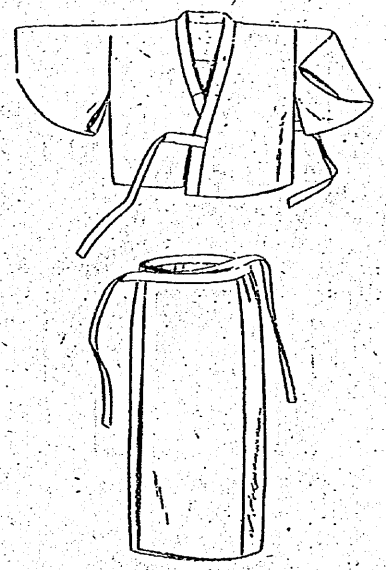
夏着ばかりでなく、わが永い傳統をもつ被服は、いろ〳〵なすぐれたところ、美しいところをそなへてゐます。

しかし、今日ではそのままに、新たな要求を加へなければならなくなりました。婦人標準服はこの意味から制定されたもので、活動及び経済に就いて、新時代の要求に合致させると共に、古來の傳統を生かし、簡素でしかも優美を失はず、又、禮容や保健にもかなふやうに考案されたものであります。

◇　標準服には甲型と乙型とありますが、似たところはどこですか。

◇　袖の形にはどんな種類がありますか。

二部式單形



材料

材料は古いものを利用することができ、又それが望ましいことです。

夏季のうは着には、木綿・スフ・銘仙の類が適します。色は一般に淡色が涼しさうに見えますが、紺・黒なども引きしまつた感じを與へます。

柄は全體に細かいものが經濟です。

仕立て方

一　寸法

上衣

丈　背丈の一倍半内外。

ゆき　手を水平にし、背の中心から手くびまで。

袖幅・肩幅　袖幅は肩幅よりも二センチ（五分）ほど廣くなるやうにゆき丈を分けます。

後幅　肩幅に同じ。

前幅　並幅一ぱい。

袖丈　三八センチ（一尺）以内。

袖口　一七センチ（四寸五分）内外。

袖附け　二三センチ（六寸）内外。

身八つ口　一三センチ（三寸五分）ぐらゐ。

衿幅　四―五・五センチ（一寸から一寸五分）。

衿肩あき　七・五―八・五センチ（二寸から二寸三分）。兵児帯をしめるものは、衿幅を狹く、衿肩あきを少くします。

くり越し　一―二センチ（三分から五分）。

前下り　四センチ（一寸）。

上衣の裾總幅が足りない時は、背縫ひの下の方を襞にして補ひます。

下衣

丈　胴廻りの所から床まで測り、帯の場合は二センチ（五分）ぐらゐ、兵児帯の場合は二〇センチ（五寸三分）ぐらゐ短くします。

幅　腰總廻りの一・四倍ぐらゐ。

紐附け幅　腰總幅から腰廻りと胴廻りとの差を引いたもの。

紐丈　胴廻りの二倍に結び代を加へた長さ。

◇　腰廻り九二センチ（二尺四寸三分）の時、前の重なりは幾らになりますか。

二　裁ち方

（一）積り方

（イ）衿幅四センチ（一寸）のもの

袖下は袋縫ひ、上衣・下衣共に裾は三つ折りぐけ、下衣の上は一センチ（三分）ぐらゐの縫ひ代として考へます。

衿用布は次のやうにして定めます。

（衿肩あきと衿幅）＋（ゆくみ）＋上衣裾幅

◇　前頁の裁ち方図によつて練用布を積つてごらんなさい。

（ロ）衿幅を廣くする場合

◇（イ）の積り方の衿用布を知り、掛衿を七六センチ（二尺）として（ロ）の積り方の衿用布を計算してごらんなさい。

（二）地直し

木綿・スフの類は輕く霧を吹き、地の目を正しく直し、巻き棒に巻いて乾かします。

銘仙類は裏から火のし又はアイロンをかけながら、地の目を正しくします。

（三）裁ち方

（イ）の図のやうに積つたのを更に疊んで、各布の丈を調べて裁ち切ります。

但し、衿肩あきは標附けの時に切ります。

◇　下の図のどこを切りますか。

三　標附け

上衣

（一）袖

（二）身ごろ

衿は割りはぎにしてから、標をします。

下衣

四布で腰總幅より廣い時は、その分を背縫ひで縫ひ込み、足りない時は衽を附けます。

四　縫ひ方

上衣

（一）袖

（イ）袖口　三つ折りぐけ。

（ロ）袖下　薄地の物は袋縫ひを、厚地ならば裁ち目のまゝ、幅標から幅標まで縫つてすくひ返し留めにします。厚地の物の縫ひ代は二枚一しょにかとります。縫ひ目はいづれも小針にし、絲をやゝつらせておきます。

◇　なぜ小針に縫ひ、絲をつらせておきますか。

（二）身ごろ

（イ）背縫ひ　二度縫ひ。

（ロ）肩當て

（一）袖下の回み　圖のやうに袖下縫ひに沿つて小針に縫ひ、絲を引きしめて袖下を整へ、襞の所を留めて、內袖にくけ附けます。

（ハ）脇縫ひ　上はすくひ返し留め、下は返し留めとし、圖のやうに始末します。

（ニ）裾　下前は真直に、上前はやや凹みをつけて三つ折りぐけにします。

◇　上前だけ裾を下げるのは、なぜですか。

（ホ）衿附け　圖のやうな形に、衿と身ごろの釣合に注意して衿を附けます。次に、みつ衿を入れ、衿幅を整へて衿をくけます。

（へ）掛衿　柄の具合を見て衿附け・衿くけの折を附け、丈は衿に合はせ、釣合を見て衿先を定め、衿に縫ひ附けます。次に、衿附けの方は掛衿が〇・一センチ（〇・三分）出るやうに、裏は無理がないやうにくけ附けます。

（ト）袖附け　標通りに待針を打ち、身ごろの方の縫ひ代は自然に斜めに折り出して三枚縫ひとし、始め終りはすくひ返し留めにします。きせは袖の方へ折ります。

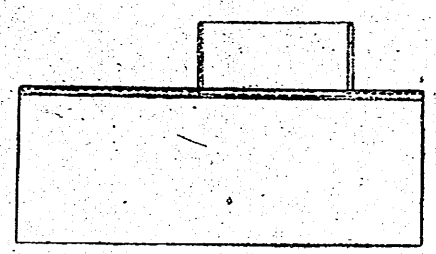
入つ口・身八つ口は耳ぐけにします。

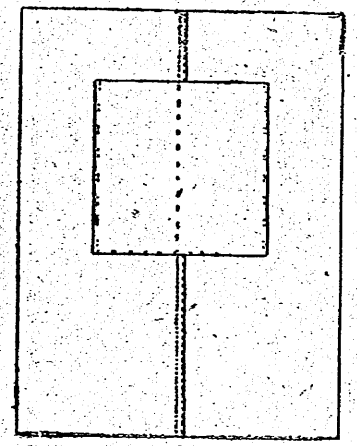
（チ）紐附け

下衣

（イ）背縫ひ　二度縫ひ。

（ロ）居敷當て

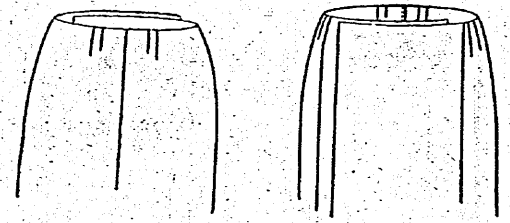




（ハ）脇縫ひ　前へ折り、耳ぐけにします。

（ニ）衿下ぐけ・裾ぐけ

（ホ）上の襞　胴廻りと腰廻りとの差を、上で襞に取ります。襞は圓のやうに取るか、或は前に一箇所増すかします。



（ヘ）紐附け　前の上を三―五センチ（八分から一寸三分）下げて紐を附けます。

◇　前を斜めに縫ひ込ひのは、なぜでせうか。

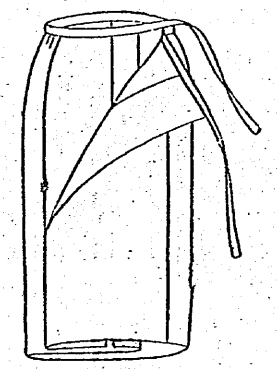
仕上げたら正しく畳んで、あしをします。

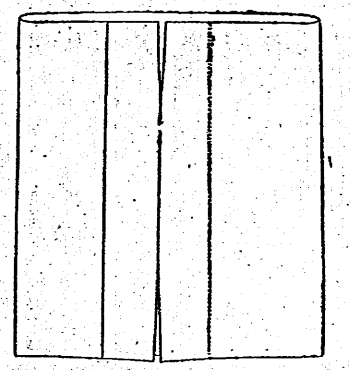
着用・手入れ

いつも折り目正しい着方をするよい傳統を忘れてはなりません。

輪式の下衣

圓布の下衣に半幅の布を加へて輪とし、裾が開かないやうに工夫したものです。





九　子供用足袋類（編み物）

子供用の足袋としては、布製のよりも、毛絲編みの方が、保温からも脱き着の便利からも適當です。

編み加減は、固いほど丈夫ではありますが、適度にゆるくした方が温かです。

足袋ばかりでなく、總べて對に作るものは、片方を編み上げてから他方に移るのでなく、材料を等分して、雙方交互に編んで行くやうにします。

その一

形

材料・用具

絲　並太一くり（二オンス）。

鈎針　一本。

◇　編み直しの絲を用ひる時は、どんな注意がいりますか。

寸法

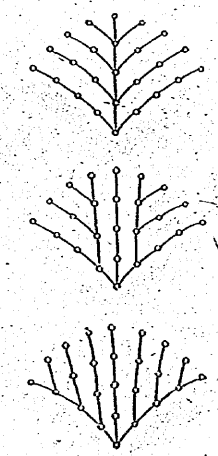
底の長さ　踵から爪先まで。

足くびの太さ　底の長さの二分の一。

底の幅　底の長さの三分の一。

編み方

先づ、底の長さより一・五―二・五センチ（四分から七分）ぐらゐ短い鎖編みを作り、この廻りを短編みで、雨端は二目づつ増して、底の幅だけ編みます。



◇　雨端の目の増し方は、どんな方法がよいでせうか。

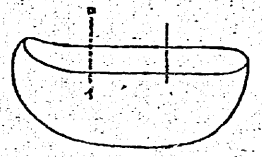
底を編んだら、底幅の半分だけ増し目なしで深さを編みます。

次に圖のやうに、底の長さを三等分したイの部分から、長編みでロの所まで減らし目をして編みます（長編み二目一度）。

ロから先は短編みをします。

次に、イの四目手前から、ロの四目向かふまで、前段と同じ長編みで、減らし目をします。

次からは前の段の四目づつ手前から減らし目をして、足くびの太さの所まで編みます。

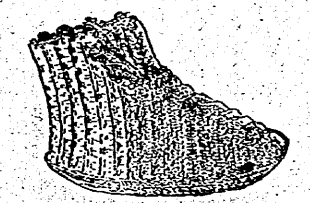


足くびの所は増減なく、短編みで五廻りほど編みます。

その二

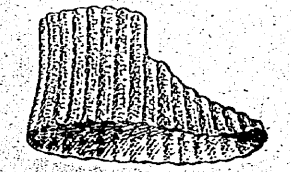
別底編みの足袋です。

底を小判型に編み、別に上部を編んで、底のまはりに編み附けます。

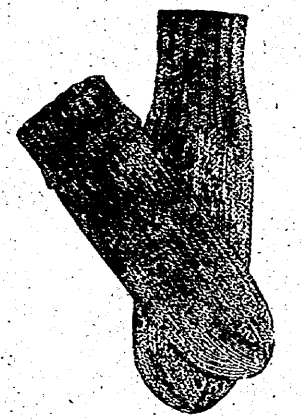


その三

踵と甲の所を區別しない簡單な短靴下です。棒針を用ひて編みます。



形



材料・用具

絲　並太二ぐり（四オンス）。
棒針　一號か二號、四本一組。
或は
絲　中細一ぐり半（三オンス）。
棒針　零號か一號、四本一組。

寸法

二五センチ（六寸五分）ぐらゐ。

目數のきめ方

絲と針の太さ、編み方の種類や手加減によつて違ひがありますが、大體次の目數でします。

並太ならば四〇―四六目。
中細ならば四六―五二目。

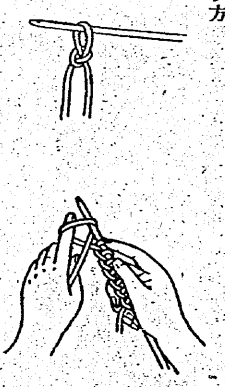
◇　絲と針の太さによつて、自分に合ふ目數を考へなさい。

編み方

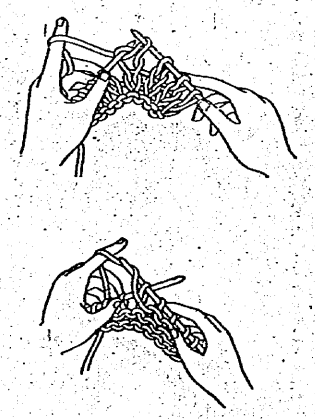
棒針編みは鈎針編みよりも絲が少くてすみ、柔かに編めますし、伸縮も一層自由です。

棒針編みの基本

（一）目の作り方

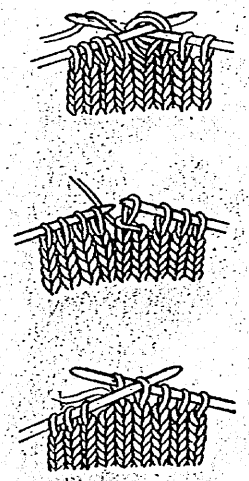


（二）表編みと裏編み



（三）目の減らし方

二目一度　かぶせ目　三目一度



（四）目の増し方

先づ、上部は長さ七―八センチ（一寸八分から二寸）ぐらゐのゴム編み（表編み二、裏編み二）をし、續けて二〇センチ（約五寸）ぐらゐ表編みをします。次に一廻りおきに六箇所（又は八箇所）で減らし目して、始めの目數の半數ぐらゐまで編みます。次の段は二廻りで半數に減らし、絲を一五センチ（四寸）殘して切り、とぢ針に通し、殘りの目を二回通して留めます。

〔増〕　幼兒用下ばき（編み物）

洗濯のはげしいものですから、なるべく丈夫な材料を用ひ、色にも注意します。

形

材料・用具

絲　並太二くり（四オンス）。

棒針　二號か三號、二本一組。

寸法

腰幅　胴廻りの半分。

股丈　腰幅と同じ。

胯下　腰幅の半分。

目數

五六目から六四目ぐらゐ。

編み方

先づ、ゴム編みを一・五センチ（四分）ぐらゐ編んだところで紐通し穴を作り、續けて三・五センチ（九分）ゴム編みをします。

次に兩面編み（往復共に表編みをくり返す）にして、圓のやうに腰幅と胯丈の長さが同じになるまで編んでから、兩端とも兩面編み二行ごとに一目づつ減らして、腰幅の目數の半數になるまで編みます。

脇下としてそのまゝ三センチ（八分）編み、次は兩端で二行ごとに一目づつ増し目をして、始めの目數になるまで編みます。あとは前と同じ形に編み續けて、兩脇をとぢ合はせます。

胴廻りの割出し方、

胴廻りの寸法は簡單に次のやうな割出しを用ひることもできます。

先づ、六歳を基準として、六〇の倍の一二〇を取つて、胴廻りの目數とします。それより二歳を増し或は減らすごとに目數を一〇づつ増減するのです。

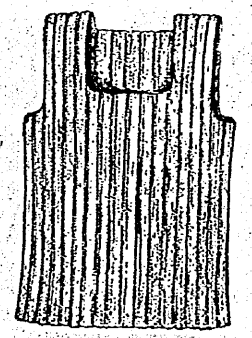
後身は各〻の半分とします。

年齢	目數
二—三歳	一〇〇
四—五歳	一一〇
六　歳	一二〇（六〇）
七—八歳	一三〇
九—一〇歳	一四〇
一一—一二歳	一五〇
一三—一四歳	一六〇
一五—一六歳	一七〇
一七—一八歳	一八〇
大人	二〇〇

〔増〕胴　着（編み物）

形

防寒用としては袖も必要ですが、こゝでは圖のやうな簡單な形に編みます。



材料・用具

絲は中細が適當ですが、並太でもよいのです。

絲　中細三くり（六オンス）ぐらゐ。

棒針　二號か三號、二本一組。

或は

絲　並太四くり（八オンス）ぐらゐ。

棒針　三號か四號、二本一組。

寸法

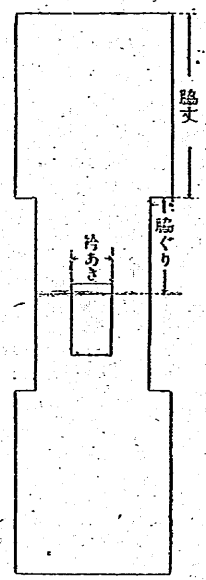
脇丈　總丈の三分の二。

脇ぐり　縦　總丈の三分の一。

横　凡そ後幅の一〇分の一。

衿あき　幅　凡そ肩幅の三分の一。

長さ　縦脇ぐりの四分の三。



編み方

全部を二目ゴム編みにします。

後身の幅の目數を作り、脇丈まで編みます。兩脇で減らし目をして、脇をくり、そのまゝの目數で後肩の二センチ（五分）手前まで編みます。

次に、衿あきとして肩幅の三分の一だけの目數を止めて、兩肩を別々に前の衿あき下の所まで編み、衿あきの目數を作り出し、前身を續けて、後身と同じ形に裾まで編みます。最後に裏から留め、兩脇をとぢ合はせます。

肩幅を狹くしたい時は、衿あきを廣くしないで、脇ぐりを増します。頭が大きければ、前の衿あきを下げます。